

(2) 各学系の研究

① 学校教育学系

ア 研究の特色

学校教育学系は、教育社会学、道徳教育、キャリア教育、生徒指導・教育相談、教育経営学、教育制度・行政学、教育方法臨床、学習過程臨床、ICT教育、総合学習、教育心理学、発達心理学、学校社会心理学、教科教育学等を主な研究領域としており、教員養成大学としての本学の教育・研究の根幹をなす研究領域を幅広く担いながら、それぞれの専門領域の立場から教育実践研究に取り組んでいる。全学的な教職必修科目を担当する教員も多い。加えて、国・地方自治体、地域社会、学校等に至る、全国の教員研修や講演会の講師も数多く手がけており、学術研究にとどまらず、実践的・臨床的な視点を携えながら、広く学校現場に開かれた研究活動に取り組んでいる。専門職学位課程の教員として、「学校支援フィールドワーク」を中心に、学部生・大学院生の指導のみならず地域の学校の支援に大きく貢献しており、また全国の研究会や実践研究の取組もリードしている。学校運営に関する評議員、教育関連の各種委員等を依頼される教員も多く、本学系教員の研究知見は広く学校教育の実践と経営に貢献しているといえる。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系は、多領域にまたがって教育・研究に取り組み、学会における研究発表と論文の投稿、著書の刊行なども進めている。また、学外においては、国・地方自治体、地域社会、学校等の各種の研修会・講演会の講師や公開講座、出前講座の講師等でも成果を上げている。

科研費の応募も多くの教員が行い、採択されている。令和6年度新規分・継続分は、基盤研究(B)として3件、基盤研究(C)として9件であった。学内においては、学内研究プロジェクトとして、本学系教員が代表を務める3件が採択された。いずれも現代的教育課題に関する先端的研究であり、学校現場に密着した教育実践研究である。

引き続き、学術的および教育実践的評価の高い研究成果を創出し発信できる環境を維持していくことが、今後の課題といえる。

② 人文・社会教育学系

ア 研究の特色

人文・社会教育学系に属する教員の主な研究領域は、国語学、国文学（近現代文学、古典文学）、国語科教育学、書写書道、英語学、英語科教育学、小学校英語教育、異文化コミュニケーション、歴史学（日本史学、世界史学）、地理学（自然地理学、地誌学）、法律学、経済学、哲学、社会科教育学（地理教育学、歴史教育学、公民教育学）と多岐にわたる。各領域で活発な研究がなされており、国際的・全国的・地域的な各学会・研究会における研究の発表や学術論文の掲載をはじめ、学会・研究会等の運営面においても重要な役割を果たしている。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

2024（令和6）年度においても、上記の各研究専門領域に関わる優れた書籍や研究論文が、本学系に所属する教員によって数多く刊行・発表された。このことは各種の書籍・論文の検索でも確認することができる。公開講座や出前講座をはじめとする研究成果を活用した学内外への貢献がなされ、地域の行政への協力や学校等での研修会講師などの教育・研究についての多くの貢献も継続されている。学内プロジェクトにおいては4件の研究が進行しており、科学研究費助成事業においても基盤研究(B)1件、基盤研究(C)5件、若手研究1件の新規分・継続分あわせて合計7件が採択されて研究が進められ、外部資金の獲得にも貢献した。

人文・社会教育学系を構成する国語分野・英語分野・社会分野では、各分野での教育学会（上越教育大学国語教育学会、上越英語教育学会、上越教育大学社会科教育学会）を組織して、長年にわたり研究会開催・会誌発行を続けることで、大学教員はもちろん、卒業生・修了生さらには地域の教員の研究活動を支援しており、今年度においても多くの成果を重ねた。

教職大学院におけるカリキュラム検討、組織改編、遠隔教育活用修学プログラム導入など、多くの検討課題が教員の多忙化に拍車をかけてきた。教育大学として質の高い研究と教育を両立させるための対応が喫緊の課題となっている。

③ 自然・生活教育学系

ア 研究の特色

自然・生活教育学系は、数学、理科、情報、技術、家庭の4つの専門分野の教員によって構成されている。

数学の分野では、代数学、幾何学、解析学、数学教育学における専門的研究を推進させるとともに、各教員の学術的知見に基づいた算数・数学教材の開発を行った。また、「上越教育大学数学教育研究会総会」の開催（7月27日(土)）や「上越数学教育研究」40号の刊行により、教員ならびに大学院生等の研究論文や実践報告を発表するなど、継続して算数・数学教育実践に直結した研究を進めている。

理科の分野は、教科教育学と教科内容学の学問領域から成り立っている。前者は理科教育学、後者は物理学、化学、生物学、地学からなっており、相互に影響し合いながら理科の分野を構成している。理科教育学では、教育現場で現在求められる課題を含めて多様な分野の研究を行い、これらは学校における理科の授業実践などを改善することにつながっている。教科内容学では、各教員が自分の専門領域の研究を行うとともに、その成果をもとに物理学、化学、生物学、地学における教材開発や素材の研究を行うなど各教員の専門性を背景とした教育研究を行った。さらに、各教員は外部資金の応募に取り組み、研究を深めようとするとともに、上越地域の小・中学校の理科の教員が主催する上越物理・化学同好会や上越科学技術教育研究会のメンバーとなり、会が主催する発表会の講師になるなど地域の理科教育の発展に努めた。

情報の分野では、情報教育の関わるICTを活用した教育、教育工学等の専門的研究を行うとともに、それらの研究成果を踏まえた教材開発を行っている。とりわけ、オンライン授業に関わる最先端の授業デザインの開発、実践に活かしている。また、教育研究の推進にあたり、積極的に科研費をはじめとする外部資金の獲得に努めている。令和6年度は1件の科研費（基盤研究(C)）において教育実践に活かすための基礎的な調査研究に取り組んだ。

技術の分野では、エネルギー変換技術の研究や、プログラミングやICTに関する技術、木材加工や加工材料に関する専門的研究を行うとともに、全員が専門性を背景とした教材研究を行っている。教科教育研究では技術教育課程開発や技術教材の機能に関する研究を中心に技術科教育の現代的課題を見据えた教育研究を行っている。また、これら教育研究の成果を基に、科研費や研究プロジェクトなど、学内外における各種研究補助金などに積極的に応募している。学外活動として、上越市内、妙高市内において小・中学生等を対象にプログラミングや材料加工に関する学習指導・実践、出前講座および公開講座を対面およびオンラインでも行っており、学校現場の課題に対応した取り組みや地域貢献活動も積極的に行っている。

家庭の分野では、各専門分野における研究及び教育・実践を通して、社会環境の変化により生じた複雑な生活課題を適切に解決することのできる、専門的な資質・能力を持った人材を育成することを目指している。そのために、各種教員研修や地域貢献も積極的に行っている。特に、令和6年度は、市民団体「あわゆき組」の開催する「あわゆき亭（高田の街を楽しむためのイベント）」に協力した。また、学生が「上越発酵鍋の会」の企画で考案したオリジナル発酵鍋を大学祭で提供し、同会が共催するイベントでも販売を行った。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、学生の教員としての資質能力を高めることを最優先に考え、教科教育や教科内容の視座からの教材開発やカリキュラム研究に真摯に取り組んでいる。各々の教員は、講義や卒業研究・修士論文を通して、教科の専門性はもちろん、教員にふさわしい思考力・判断力・表現力を備えてもらうべく、

責任を持った学生の指導にあたっている。また、本学が主催する出前講座等に率先して参加し、地域貢献の役割も果たしている。

本学系の教員は外部資金獲得にも積極的に取り組んでおり、多くの教員が科学研究費補助金の交付を受けている。国際的に活躍している研究者が複数いることは本学系の特に優れた点であるが、継続して学術的評価の高い成果を創出できる研究環境を維持していくことが課題といえる。令和6年度は教職大学院移行3年目となったが、引き続き、それに伴う教育体制の整備・拡充も、重要な課題と考える。

④ 芸術・体育・教科横断・総合教育学系

ア 研究の特色

芸術・体育・教科横断・総合教育学系に所属する教員の主な研究領域は、音楽、器楽、作曲、音楽学、音楽科教育、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術理論・美術史、美術科教育、体育学、運動学、体育科教育、教科横断、国際理解、ICT・プログラミング、生活科・総合的な学習といった音楽、美術、保健体育の教科や教科横断、国際理解等に関連した基礎的及び応用的な研究領域に及ぶ。また、これらの領域は実技指導や作品・演奏発表に関しても地域社会と密接に関わり、近隣の学校や地域において音楽や美術、スポーツの普及・発展に尽力するとともに、コンクールや競技会において審査員や競技役員等を委嘱される機会も多い。令和6年度も本学系では各教員の専門を生かした地域貢献活動が活発に進められたほか、教科や領域を超えた学際的な教育、研究が進められた。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本年度の研究の成果としては、学内研究プロジェクトについては4件、上越教育大学研究プロジェクト「学校体育『体づくり運動』における創造性を育む運動教材の開発—安全性を重視したパルクール学習方法の検証—」（令和5年度～6年度 研究代表者：長谷川晃一、研究協力者：周東和好、直原幹）、「SDGsのリテラシーと確認指標の開発研究」（令和5～6年度 研究代表者：渡辺径子、研究協力者：釜田聡）、「ICTを活用した国際交流モデルの開発～日本と中国、台湾、韓国、オーストラリア、デンマークの中学生との協働遠隔授業の実践的研究と現地フィールドワークを通して～」（令和6～7年度 研究代表者：佐藤大輔、研究協力者：釜田聡）、および兵庫教育大学大学院連合研究プロジェクト「教科指導におけるSTEAM教育の多様性と汎用性に関する国際調査研究」（研究代表者：菅井三実、研究分担者：時得紀子ほか、『教科指導におけるSTEAM教育の新展開』開拓社を本研究結果として令和7年2月発刊）を行った。

科学研究費については10件、「能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築」（令和3年度～6年度 基盤研究A、研究代表者：山中玲子、研究分担者：玉村恭）、「教科等横断的な音楽科授業プログラムの国際比較に基づく開発と評価」（令和4年度～6年度、基盤研究(C)、研究代表者：時得紀子）、「『佐渡の能楽』再考：非専門家による非専従的な取り組みに着目して」（基盤研究C、研究代表者：玉村恭）、「楽譜の旋律を対象とした、人間の感性を模擬する人工知能の開発」（令和4年度～7年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：22K12329、研究代表者：川村 暁、研究分担者：長谷川正規 他）、「教員養成における音楽授業プログラムの国際比較研究：領域横断的な視点から」基盤研究(C)（研究代表者：時得紀子）、「シンクロトロン光による 青色陶磁器顔料 発と初期染付の技術史研究」（令和4年度～6年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：22K00205、兪期天）、「ダンスの教育効果を高めるために不可欠な基本ステップの動感に着目した指導方法の開発」（令和3年度～6年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：21K11508、研究代表者：長谷川晃一、研究分担者：周東和好）、「低強度負荷による疲労困憊時になぜ余力は残るのか」（令和5年度～7年度 基盤研究(C)（一般）課題番号：23K10760、研究代表者：松浦亮太）、「日中韓協取り組み研究による「異己」との対話と共創を重視した国際理解教育のプログラム開発（令和3～7年度 基盤研究(B)、研究代表者：釜田聡）、「小中高等学校をつなぐ系統的プログラミング教育カリキュラムと指導法の開発」（令和4～7年度 基盤研究(C)、研究代表者：山西潤一、研究分担者：清水雅之ほか）に交付された。

学会活動については、音楽では、日本学校音楽教育実践学会第19回北陸支部例会（上越教育大学）を開催し、主催大学企画提案も行った。学術論文掲載数は1編（国際誌）、著書2件（うち訳書1件）、研究発表数は4件（国際学会1件、全国学会2件、地方学会1件）であった。

美術では、第8回美術教育実践学会研究発表大会（池田記念美術館）を企画・実施した。

保健体育では、日本体育・スポーツ・健康学会スポーツ文化研究部会委員として社会貢献に関わる学会改革の事業に参画した。また、日本体操学会の依頼に基づき第24回学会大会において基調講演および基調ワークショップの講師を担当した。学術論文掲載数は5編（全国誌2編、地方誌3編）、研究発表数は5件（全国学会4件、地方学会1件）であった。

教科横断では、学術論文掲載数は4編（国際誌1編、全国誌3編）、著書1件、研究発表数は2件（全国学会2件）であった。

総合では、論文掲載数は1編、研究発表数は2件（全国学会2件）であった。

社会貢献としては、音楽では、越の風 vol.13（新潟市民芸術文化会館スタジオA）《雨 ときどき 晴れ》（中学生のためのピアノ曲）の指導者、新潟大学附属新潟小学校の研究発表会の指導者、上越教育大学附属中学校の研究発表会の指導者、上越音楽教育研究会の指導者、佐渡市中学校教育研究会音楽部の指導者、令和6年度新潟県高文連日本音楽演奏発表会審査委員長、上越市民吹奏楽団の指揮・指導、上越交響楽団および北区フィルハーモニー管弦楽団の指揮・指導を務めた。また、新潟県文化祭2024第45回邦楽演奏会（@リージョンプラザ上越）に有志学生と教員が出演した。講演会「〈アート思考 Art Thinking〉とは何か：STEAM教育のこれまでとこれからを考えるために」（内田エネルギー科学振興財団科学技術知識普及事業費助成）および令和6年度大学と地域が連携した地域づくり応援事業「佐渡地域の地域活性化事業」を企画・実施した。出前講座「ガムランに触れてみよう」、「和楽器・日本音楽の世界」、「吹奏楽における作品演奏の実践」、「合奏の基礎—その目的と効率的な方法—」を実施した。長岡サマーミュージックフェス・講座「第九のおはなし」、上越ジュニア音楽クラブ設立に関する助言、「なおえつうみまちアート『うみまちピアノ』」を実施した。

美術では、池田記念美術館を会場として「美術教育実践学会」を企画・実施し、全国から美術教育にかかわる研究者が参集した。また「上越市美術展覧会」や「妙高市四季彩展」の企画・運営への参画、「なおえつうみまちアート」におけるワークショップの開催、小林古径記念美術館主催高校生講座の講師、「妙高四季彩芸術展グラフィック（ポスター・パンフレット等）」の作成、「高田本町百年商店街絵看板」の作成等を行った。また、「新潟県児童生徒絵画・版画コンクール」、「妙高ジュニア芸術展」等県内の児童生徒作品の審査、「ふるさとの風景展」（喜多方市美術館）の展覧会審査、新潟県立近代美術館協議会員、小林古径記念美術館運営委員等、地域の芸術文化振興に大きく寄与した。他、公開講座（「ロクロで器を作ろう」、「デッサンを楽しむ」「木彫を楽しむ」）を通して大学での研究を社会に還元した。

保健体育では、新潟県保育士会講演会講師、妙高市教育委員会幼児期運動指導アドバイザーおよび幼稚園教諭・保育士研修会講師、上越市教育研究会保健体育部門講演会、長岡市教育センター教員研修講座講師、糸魚川市学校教育研究協議会指導者、上越市地域クラブ活動推進委員会委員長、糸魚川市教育委員会部活動の地域移行に関する検討会議議長、糸魚川市教育委員会懇談会講師、上越市教育委員会健康づくり推進課・スポーツ推進課と共同した上越市オリジナルの健康運動プログラム教室「上越一健康運動プログラム教室（J-WELLNESS）」講師、新潟県立武道館開館に開設された体力測定事業（高齢者向け）に関する体力測定プログラムの立案・提供および剣道教室講師、運動部活動指導員研修会講師（附属中学校）、上越市地域クラブ活動（文化系）指導者講習会講師、糸魚川市地域クラブ指導者・スポーツ協会ジュニアスポーツクラブ指導者・部活動指導員研修講師、妙高市教育研究会/秋の一斉研修会/体育・保健体育部会講師、上越市スポーツ指導者講習会講師を務め、地域の体育・スポーツ事業等に参画

するとともに、公開講座や出前講座も通して大学での研究を社会に還元した。

教科横断では、上越市教育委員会上越市スポーツ推進審議会委員長、柏崎市教育センター研修、新潟県学校体育研究連合会中越支部研修、長岡体育サークル授業研究会、中越体育の会研修会、上越学校体育研究会研修会の講師を務め、学校や地域と連携した教育研究活動に寄与した。また、新潟県ジュニア美術展、新潟県中越教育美術展、新潟教育アート展、新潟県児童生徒絵画版画コンクールの審査委員や、南魚沼市池田記念美術館研究協力者、一般社団法人愛南魚沼みらい塾 YouKey プロジェクト助言者として地域の美術事業等に参画、寄与した。また、上越市立国府小学校運営協議会委員、上越市立直江津南小学校運営協議会委員、上越国語教育連絡協議会顧問、上越国語同好会委員を務め、学校や地域と連携した教育研究活動に寄与した。また、長野県教育委員会との連携による教員研究講座、サテライト講座（新潟会場）、教職員のための自主セミナー、柏崎市立教育センター研修講座の講師を務め、学校現場の課題解決に資する研修を実施した。公開講座「脂肪を効果的に減らすために必要な運動の『きつさ』を知ろう」、出前講座「言葉による見方・考え方を働かせながら学びを深める国語単元学習」を通して大学での研究を社会に還元した。

総合では、文部科学省初等中等教育局国際教育課「異文化理解ステップアップ事業」審査委員会委員、文部科学省総合教育政策局国際教育課「グローバル人材育成の基盤形成事業（国際交流・留学環境整備事業）」審査委員会委員、文部科学省総合教育政策局国際教育課「国費高校生留学生推進事」審査委員会委員、新潟県国際交流協会「国際交流ファシリテーター事業」専任アドバイザー、文部科学省学校DX戦略アドバイザー、新潟市教育委員会新潟市教職員育成協議会委員、上越市立春日新田小学校学校運営協議会委員、上越市立直江津小学校学校運営協議会委員、新潟県環境審議会委員、教育出版「生活科」教科書編集委員、国立妙高青少年自然の家運営協議会委員、宿泊体験交流施設月影の郷運営委員会委員、上越市立大町小学校学校運営協議会委員、上越市立高田西小学校学校運営協議会委員を務め、「SDGs 子ども大学 in 上越」の企画・運営を実施した。

このように学系所属の教員により活発に研究が進められ、その成果が地域社会に様々な形態で還元された。

今後の課題として、令和4年度からの教職大学院への移行に伴う大学院の定員確保の観点も含め、本学がより魅力ある研究機関であることを発信するためにも、さらなるそれぞれの専門領域に関する研究の充実、社会貢献を含めた研究内容の還元や地域事業への積極的な参画などが挙げられる。

⑤ 発達支援・心理臨床教育学系

ア 研究の特色

本学系では、障害による特別な教育的ニーズのある子どもの教育、心理・生理、教育課程・指導法などに関する研究、幼年期における教育・保育、幼児の発達理解と支援、児童虐待等子どもを取り巻く問題に関する研究、学校教育の円滑な実施とその成果を確保していく上で最も基盤となる児童生徒の健康に寄与する理論や方法に関する研究、臨床心理学に基づく、いじめ、不登校、発達障害、非行、虐待、自殺、犯罪被害、地震災害などの問題解決に向けた研究を行っている。特別支援教育実践研究センター、健康教育研究センター、心理教育相談センター、附属幼稚園をはじめとする臨床研究の場において、学校における喫緊の課題に対応するための臨床的、実践的研究を推進している。

イ 優れた点及び今後の検討課題等

本学系では、各センター及び地域の学校等において多様な臨床研究を展開しており、それらの成果を、『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』や『上越教育大学心理教育相談研究』の他、関連学会や大学紀要等において公表している。また、学校及び地域社会を含めた健康教育（学校安全、学校保健）や健康課題への対応に関する研究も行っている。

このような研究活動の一環として、令和6年度は次の学内研究プロジェクトを実施した。

- ・学習面に困難を有する児童のワーキングメモリの特性に応じた支援方法の検証
 - ・早期療育施設におけるマインドフルネスに基づくペアレント・トレーニングの実現可能性研究
- また、科学研究費補助金により次の6件の研究（研究代表者分）を実施した。
- ・自然保育認定・認証制度の影響と効果に関する実証的研究
 - ・薬物問題をもつ当事者と家族の「家族としての回復」についての研究
 - ・ICT技術を活用した熱中症リスク判定ツールの開発、
 - ・大学生における不適応的な行動と環境のクラスター化による睡眠衛生教育の最適化、
 - ・対人志向的ピア・サポートにおける感謝と負債感を活用した援助行動促進プロセスの解明
 - ・中学生のゲーム依存予防を目的とした学級単位のマインドフルネス・プログラムの開発

以上のように、本学系では、各領域の専門性を活かした活発な研究活動を展開している。今後は、退職や異動等に伴う研究機能の低下を補うことにより、地域における教育の推進に貢献できる教育・研究活動を更に充実させていく必要がある。また、学系の構成員が兼務教員となっている各センターの機能的な強化を図ることも重要である。特に、専門職学位課程における学校実習の一環として、特別支援教育実践研究センター及び健康教育研究センターの機能を最大限に活用していくための施策を講じることが急務である。